

〈図書紹介〉

徳井淑子著『色で読む中世ヨーロッパ』

講談社選書メチエ364、2006年

● 吉澤京子

われわれが衣服を買うときの決め手は何だろうか。色で選ぶ場合、冠婚葬祭など TPO の制約がないなら、好きな色や流行色を手にとるのではないかと思う。しかしそのときわれわれは、色のもつ意味を考えるだろうか。

私事になるが、留学中に友人たちのお喋りの話題が花嫁衣裳のなったときのこと。「日本では？」

と尋ねられたので、洋装の場合は白だが、和装では黒い振袖や赤、青など様々な色の打掛を着ると答えたところ、アメリカ人が驚いたような表情で「Red…passion！」とつぶやいた。「赤は情熱の色ということか。すると、花嫁が情熱の色を着ることは欧米人には意外なのかな」と思い、小さなカルチャーショックを受けたことを思い

出す。文化が異なれば色に対する感情も異なる。抽象的に想像はできるけれども、具体的にはどうなのか。このテーマを過去に遡り、分かりやすく述べた書物が『色で読む中世ヨーロッパ』である。

西洋服飾史家として名高い徳井氏は、15世紀前半にフランス語で著された『色彩の紋章』の記述を縦糸に、その記述内容に対応する様々な事例を横糸として、前半では白、黒、赤、青、緑、黄という主要色について緻密な解釈を行い、後半では特定の色や複数の色を組み合わせることのマイナス・イメージや民族差別、職業差別との関連、さらに特定の色については時代によって意味が変化したことなどについて、豊富な文献資料

や画像資料に基づき社会的・宗教的背景もふまえて、説得力ある考察を展開している。

同書の冒頭にあるように、「色のイメージ形成には長い歴史があり、すがたを変えながら色の意味は後世に受け継がれていく。……中世の色の意味世界を知ること、今日のヨーロッパ文明を知ることにつながる。」その通りである。ビジネス・スーツはなぜ黒やグレーを基調としているのか。アンネ・フランクが胸につけた星印はなぜ黄色だったのか。この書物はわれわれが今まで何気なく目にしてきた異文化の色について、新たな気づきを喚起してくれることだろう。